

少年團結白虎隊 國歩艱難戊堡塞
大軍突如風雨來 殺氣慘澹白日晦
鼙鼓喧闐震百雷 巨砲連發僵屍堆
殊死突陣怒髮立 縱橫奮擊一面開
時不利兮戰且卻 身裹瘡痍口含藥
腹背皆敵將何之 杖劍間行攀丘岳
南望鶴城砲煙颺 痛哭吞淚且彷徨
宗社亡兮我事畢 十有六人屠腹僵
俯仰此十有七年 畫之文之世間傳
忠烈赫赫如前日 壓倒田橫麾下賢

白虎隊（佐原盛純）

少年團結す 白虎隊
國歩艱難 堡塞を 戍る
大軍 突如 風雨 来る
殺氣 慘澹 白日 晦し
鼙鼓 喧闐 百雷 震う
巨砲 連發 僵屍 堆し
殊死 陣を 突いて 怒髮 立つ
縱横 奮激 一面 開く
時に 利あらず 戦い 且つ 卻く
身に 瘡瘍を 裹み 口に 藥を 含む
腹背 皆敵 將に 何くにか 之かんとす
劍を 杖つき 間行 丘岳を 攀ず
南 鶴ヶ城を 望めば 砲煙 颺る
痛哭 涙 吞んで 且つ 彷徨す
宗社 亡びぬ 吾が 事 畢る
十有 六人 屠腹して 僵る
俯仰す 此に 十有 七年
之を 画き 之を 文にし 世間に 伝う
忠烈 赫々 前日の 如し
圧倒す 田横 麾下の 賢

解説 戊辰戦争の時、会津落城の際、飯盛山に自刃して難に殉じた白虎隊の壮烈な最後を詠じたもの。

語釈 ※白虎隊 国家の運命。 ※艱難 苦しみ悩む。 ※戊堡塞 武器をとり砦を守る。 ※大軍 官軍をさす。 ※突如 急に。 ※風雨来 風雨の如く大軍が来る。 ※殺氣 殺伐な気。 ※慘澹 惨めさ。 ※白日晦 太陽が曇る。 ※鼙鼓 攻め太鼓。 ※喧闐 騒ぎ立てる。 ※百雷 音が凄まじい。 ※連發 続けて打つ。 ※殊死 死ぬ覚悟を決める。 ※突陣 陣中に突進する。 ※怒髮 怒って逆立った髪。 ※縦横奮撃 東西南北に、四方八方に奮戦する。 ※一面開 敵の囲みを突き崩して、血路を開く。 ※瘡瘍 切りきず。 ※腹背皆敵 後ろも前も敵。 ※将何行 時勢が味方に有利に展開しない。 ※杖劍 劍を杖とする。 ※間行 ぬけ道を行く。 ※丘岳 飯盛山。 ※痛哭 激しく大声で泣く。 ※彷徨 さまよう。 ※宗社 先祖の御霊を祀る所。 ※我事畢 臣下の務めは終わった。 ※俯仰 感慨追想にふける。 ※此十有七年 白虎隊が死して今日まで、十七年の歳月が流れた。 ※忠烈 誠忠義烈。 ※如前日 記憶に新しい。 ※田横 斉王のこと。 田横に従って殉死した故事をさす。 ※麾下 部下。

通釈 戊辰の役に会津藩の少年達は團結して白虎隊を編成し藩が一大事に迫った時、砦を守った。官軍は風雨の如く押し寄せ、殺氣は漲り、辺りは昼なお暗い有様である。官軍の陣太鼓の音は鳴り渡り、大砲は止む事なく、死者の屍が高くなっていった。白虎隊は決死の覚悟で敵陣に突入。怒髪天をつくばかりに、縦横に奮戦し血路を開く。だが、時は不利となり、戦いは退かざるをえなかった。少年達は傷口を包み口に薬を含んだ。辺りは何れも敵、どこに進路をとるべきかわからない。劍を杖とし鶴ヶ城を望むと、城は砲火に包まれ黒煙が上がっている。落城かと少年達は無念さに涙をのみ、丘を彷徨うばかり。わが藩は亡んだ。我々、臣下の務めもこれまでと、主君に殉ずるのがわが道と少年たちは自刃、屠腹し、若き命を散らした。顧みれば白虎隊憤死より今日まで十七年。この惨ましい最後を画き、文にして伝えてきた。その誠忠義烈の精神は、昨日の様に人の胸を打つ。かの斉王・田横が死んだ時、日頃の知己の恩に報いようと、その麾下五百人が後を追って死んだが、白虎隊の少年達の死はそれを凌ぐものがある。